

関西大学博物館所蔵・内藤湖南の朝鮮陶磁コレクション

——《青磁日暈文茶碗》《青磁象嵌菊文皿》《粉青印花雨点文皿》《白磁絵付皿「新羅朴順作」銘》——

裴 洙 淨

はじめに

近代日本の代表的な東洋史学者とされている内藤湖南（一八六六—一九三四、本名虎次郎、以下湖南とする）は、秋田県で生まれ、一八八七年に上京し、仏教雑誌『明教新誌』の新聞記者や、『大阪朝日新聞』、『日本人』などの編集者として働き、一九〇七年からは京都帝国大学文科大文学講師になる。一九二六年まで京都帝国大学で東洋史学講座を教えながら、「京都支那学」を創設し、東洋史（京都学派）の基礎を作った人物である。晩年には京都の恭仁山荘（現木津川市）で隠居生活を送った。湖南は、「歴史の発展という観点から東洋史の区分を行った最初の学者」として評価され、中国史の時代区分に最も貢献し、現在でも（日本の支那学）分野に大きな影響を及ぼしている学者である。

一方、湖南は美術の方面でも、とくに京都帝国大学時代から現地調査を踏まえて中国絵画に関してよく著述をしているが、彼の没後に出版された『支那絵画史』（一九三八年）がその成果の集大成である。面白いことに『支那絵画史』の付録に、「朝鮮安堅の夢遊桃源図」、「高句麗古墳の

壁画に就いて」という二つの朝鮮に関する著述^②、そして「日本美術史序」という著述が収録されている。とくに湖南の「朝鮮安堅の夢遊桃源図」という論文は、朝鮮時代の画家安堅の「夢遊桃源図」について初めて取り上げ、解説を試みたことで評価されている。

湖南は、中国絵画及び書画、青銅器などを評価するのではなく、散逸されそうな優れた中国美術品の蒐集もしており、その膨大なコレクションの中では、国宝や重要文化財となったものも多数ある^③。とくに湖南が活動した関西地方において、泉屋博古館、大和文華館、大阪市立美術館、京都国立博物館などに湖南による中国美術品のコレクションが多く所蔵されている^④。

湖南が中国美術品の愛好者であったため、中国の収集品に比べると、朝鮮の収集品は数少ないが、関心がないわけではなかった。というのも、問島問題という歴史的な調査のための朝鮮現地調査^⑤や、朝鮮史関係の文献をも著述していたからである。とくに湖南は、古代三国時代の開国史に関心を抱き、京都帝国大学教師の時期から朝鮮史を教えながら、朝鮮古代開国史に関する論説を一九一一年三月六日から九日まで、大阪朝日新聞に寄稿していた^⑥。ただ、湖南の朝鮮への関心は、当時日本の史学者の朝鮮古代史研究に便乗したわけでもある^⑦。

そこで、本稿では、関西大学博物館所蔵の湖南コレクションの中で、朝鮮陶磁の四点を紹介してみることで、湖南の朝鮮陶磁コレクションの特徴に関して理解を深めたい。

一、関西大学所蔵湖南コレクションでの位置

関西大学には、膨大な湖南コレクションがあり、とくに関西大学図書館が所蔵している「内藤文庫」という蔵書は、およそ二万七千点に及んでいる。収蔵の経緯を詳しくみると、関西大学名誉教授の奥村郁三が湖南の子息の伯健の高弟であったため、一九八三年に約三万点に至る湖南・伯健父子二代の収集にかかる内外の書物と書画、書簡などを譲り受けて「内藤文庫」として収蔵した^⑩。加えて、一九八六年には関西大学創立百周年記念として湖南が晩年過ごした別荘の恭仁山荘も入手し、その中にある書籍も内藤文庫に加えられた^⑪。さらに、近年は湖南の公用旅券をも入手した^⑫。

他方、湖南コレクションにおいて、書物・書画・書簡以外の美術品については、現在出版されている『内藤文庫目録』には収録されていない。ただ、関西大学博物館による湖南コレクションリストを閲覧すると、関西大学図書館から博物館に移管した年が一九九八年である。そして、一九九六年四月七日から五月一九日まで開かれた関西大学博物館企画展「東洋史学の泰斗 内藤湖南展——総合図書館所蔵「内藤文庫」漢籍と遺愛品——」のチラシ内容に「総合図書館の協力を得、その資料を借用し、湖南の遺愛の品及び写真類を展示」という記述をみることができ。そうすると、一九八三年と一九八六年のいずれかの年に関西大学図書館に湖南の遺品として美術品も所蔵され、一九九八年に図書館から博物館に移管されたと推測できる。

また、博物館所蔵の湖南コレクションリストによると、全部で一二六

点が確認できるが、その中で、文房具類とガラス乾板写真類が目立ち、それ以外に、陶磁、土器、刀、銅剣、仏具、楽器、旅行カバンなどの種類をみることができ。湖南収集品の詳細な調査は、進行中であり、朝鮮コレクションについても同様である。今のところ、湖南コレクションリストから確認できるものとしては、乾板写真類（朝鮮平安南道龍岡郡雙楹塚後室と平安南道大同郡湖南里四神塚玄室、江西遇賢里大墓玄室などの壁に描かれている四神図、また高麗時代石棺彫刻四神図）と、朝鮮総督府専門会証明書付きの紅種人蔘の四個などがある。そして、「小皿」と分類されている陶磁の中で、五点セットで登録されているものがあるが、五点の中の一点の備考欄に「新羅朴順作」と書かれていることを契機に、実際調査を行った。その結果、『白磁碗』一点を除いて朝鮮陶磁と見られ、それらを本稿で紹介する次第である。

二、湖南の朝鮮陶磁コレクション

さて、本稿で紹介する湖南コレクションの朝鮮陶磁四点は、高麗時代のやきものである青磁二点と、朝鮮時代のやきものである紛青磁一点、白磁一点に分類することができる。それでは、時系列で高麗時代（九一八—一三九二）の青磁から見ていきたい。

まず、青磁は二種類で、高麗初期の純青磁（無文青磁）類の《青磁日暈文茶碗》【図1】と、高麗中期の象嵌青磁類の《青磁象嵌菊文皿》【図2】がある。一つずつみてみると、『青磁日暈文茶碗』【図1】は、口径・一〇×一〇・三、高・四・二×四・三、高台径・三・七センチメートル

で、典型的な日暈文茶碗の一つである。〈翡色青磁^⑧〉と言われる綺麗な薄い青色の高麗青磁の制作時期が全盛期の一二世紀であり、本作品は、高麗時代が始まる頃の九〜一〇世紀のものと思われる。なぜなら、釉調がまだ青色になる前段階の緑黄色である点、またもつとも初期の高台によくみられる〈日暈文^⑨〉高台である点を指摘できるからである。朝鮮の全羅南道康津郡大口面龍雲里の〈日暈文〉【図1-4】と京畿道龍仁二東面西里の編年資料【図1-5】と本作品の高台【図1-2、3】を比べてみると、同様であると考えられる。加えて、中国の〈日暈文〉【1-6】は、接地面のサイズが一・五センチメートル内外である反面、朝鮮の〈日暈文〉は、一センチメートル内外であるので、高麗初期の日暈文茶碗に間違いはない。要するに、高麗初期の〈日暈文茶碗〉を代表する作例といえる。

また、《青磁象嵌菊文皿》【図2】は、口径：一〇・四×一〇、高：二・五〜三、高台径：六・九センチメートルで、時代的には一三世紀のものとみられる。一三世紀に入ると、中国の影響から離れて、朝鮮独自の象嵌技法を施した青磁が際立つ。本作品の《青磁象嵌菊文皿》は、【図1】の《青磁日暈文茶碗》とは異なって、釉調が薄青色の湖のように綺麗な翡色を浮かべ、内縁部の境界線のところは、釉薬の流れが留まって濃い青色になっているため、一層内縁部が湖面のように深みを感じる。また、器面外側には白象嵌した二本の条線を上下に巡らせ、その中央部の三カ所に菊を象嵌している。【図2-1】さらに、器面外側に施した菊文は、菊の花を白象嵌で、葉っぱを黒象嵌で施すことで、白と黒の調和を実現しているが、そのような黒白象嵌の菊文は、典型的によく使われていた。

【図2-2】一方、器面内側には、内底面の真ん中に白象嵌の二重円圈を巡らして、その中に一点の菊文を白象嵌し、その菊文と同類のものを口縁部内側の四カ所に白象嵌している。加えて、内底面の白象嵌の二重円圈に沿って如意頭文を同じく白象嵌している。【図2-3】そこで、注目したいのは文様であるが、《青磁象嵌菊文皿》【図2】で使われた〈菊文〉と〈如意頭文〉は、高麗人の心性と信心を表している。とりわけ、〈菊文〉は一三世紀から一五世紀まで愛好された文様で、一三世紀から流行した道教思想が反映されている。すなわち、自然に帰依したいソンビ（韓国の文人）の心性が周辺によく咲いている野の菊に同化されたわけである。^⑩また、〈如意頭文〉は、篆字の心を表すワラビ形を文様化したもので、僧侶の説法する際の道具でもある。要するに、〈菊文〉と〈如意頭文〉には、仏教と道教が流行した当時の時代状況と高麗人の情緒が潜められている。一三世紀の象嵌青磁が全羅南道康津郡と、全羅北道扶安郡しかないという研究報告によつて、^⑪おそらく制作地は、その二つの地域のいずれかであると考えられる。同じく菊文を用いて象嵌技法を施したものと、荔枝文を加えた《青磁象嵌荔枝菊花文大鉢》【図2-5】と、一四世紀の《青磁象嵌菊花文八角皿》【図2-6】のようなものもある。最後に高台は、広く作つて安定感を出している点があるのに比べ、その内側には三点の珪石目跡【図2-4】を残しているが、珪石目跡の一点が大きく残され、全体的なお皿の形がより歪んでいるように見える。加えて、口縁部に欠けているところが多小ある。

ただし、少々の欠点はあつても《青磁象嵌菊文皿》は、釉薬の発色と、文様と技法などが洗練され、柔らかく品のある青色の象嵌青磁である。

次に、朝鮮時代（一三九二～一九一〇）の白磁が登場する前の《紛青印花雨点文皿》【図3】（口径…一三・五、高…三・七、高台径…五・七～五・九センチメートル）と、《白磁絵付皿「新羅朴順作」銘》【図4】（口径…二三・七、高…三・六、高台…九センチメートル）について、順次紹介する。

まず、《紛青印花雨点文皿》【図3】を紹介したい。粉青磁とは、朝鮮時代初期に生まれ、高麗青磁から朝鮮白磁への移行期、すなわち一四世紀末から一六世紀にかけて作られた陶磁器である。最初の粉青磁においては、高麗時代の象嵌の技法が伝承され（象嵌青磁、印花青磁）、その技法で白磁の象嵌をする（象嵌粉青、印花粉青）ものが目立つが、白磁の要求が高まっていくにつれて、白土釉に陶磁の胴体の全体をつける（粉粧粉青）ものが多くなる。後に、それが白磁生産の増加で、姿を失うようになる反面、白磁天下になる。そのようなことを踏まえて、《紛青印花雨点文皿》【図3】をみると、初期の青磁によくみられる《印花文》が施された点と釉薬の発色がまだ灰色に近い録青色になっている点から、一五世紀のものと考えられる。器面内側には、内底部真ん中の印と六重円圏文を中心に菊花文、三重圏文、雨点文、三重圏文を順次に巡らしながら押印されている。【図3、3-1】また、器面外側には、雨点文が口縁部へ行くにつれて広がっているように巡らしながら押印され、また口縁部の近くに三重圏文が施されている。【図3-2】そして、口縁部が少々外反され、内底部には耐火土目をあてて焼成した跡が五点残っている。【図3-3】口縁部と高台に釉薬が掛かっていない部分があり、そこから胎土が現われている。注目したい部分は、内底部真ん中の印である【図

3-3】。おそらく四角の中で「官司銘」が入っていると思われるが、その部分が欠けているか、きちんと押されてなかったのか不明であるが、その「官司銘」が確認できない。紛青磁には「官司銘」が入っている皿と鉢がよくみられるが、現在編年資料として価値を有している。「官司銘」は「敬承部」、「仁寧部」、「徳寧部」、「内瞻寺」など様々であるが、施す方法として、白象嵌、黒象嵌、印花技法を使っている。本作品《紛青印花雨点文皿》【図3】を見ると、《紛青印花徳寧部銘集團連圏文》【図3-4】（一四五五～一四五七）の白象嵌と異なって、《紛青印花内瞻銘大鉢》【図3-5】（二五～一六世紀）や《紛青沙器印花文「内瞻」銘鉢》【図3-6】のように印鑑によって押印されているものであることが推測できよう。従来の研究報告によると、押印されている「官司銘」は、「内瞻」のみであり、また「内瞻寺」が主に女真と矮人の接待の業務をする官庁であることから、断言するのは難しいが、おそらく本作品の内底部真ん中に「内瞻」銘が押されていたのではないだろうか。

最後に《白磁絵付皿「新羅朴順作」銘》【図4】であるが、器形は《紛青印花雨点文皿》【図3】と類似していて、口縁部が柔らかに外反され、高台は小ぶりである。白磁の釉薬の発色は、灰白色で、雑物が少々入っている。器面内側部は、はっきり二段になっており、内底部のところに絵付されている。絵付を詳しくみると、壺を頭の上に載せている韓服を着た朝鮮婦人と子供が真ん中に位置され、後の遠景に山を、人物を囲んで茂みが配置されているが、【図4、4-1】左側に大きくはっきり茂みを描き、右側はぼやけて小さく茂みを描いている。【図4-2、4-3】そして、前景には川が流れている。【図4-4】すなわち、遠景法と

明暗法という西洋画法を用いて描かれていることから、一八世紀以降のものだと推測できる。加えて、油絵具で描かれたような釉薬とは思えない鮮やかな色合いで描かれ、まるで完成された白磁に油絵具で描かれたように浮いている。その点は、器面外側の絵付も同様であり、高台を中心に左右反対に同じ太極文様を口縁部に近い上段部に描き【図4-5】、太極文様の真ん中に「新羅朴順作」【図4-6】と記されている。ただ、「新羅朴順作」銘は、普通は署名しないところに、また内底部の水彩画の描き方と違って、鮮明な赤色で丁寧に描かれていることから、署名を強調したかったのではないだろうか。なぜこのような絵付が施されていたのか。前述したように、湖南は間島問題調査などで朝鮮を訪ねたことがある。その中で、一九〇八年八月から一〇月までは目的が知られていないが、釜山で二つの葉書を息子内藤乾吉宛に送っている。一つは釜山の市場の風景写真ともう一つが釜山で見た朝鮮婦人二人の絵ハガキ【図4-7】である。絵ハガキの表には「：見た朝鮮の女です：」と書いており、裏面には韓服を着て、頭の上に物を載せて歩いている姿が描かれている。おそらく、湖南は朝鮮へ渡った時に、このような朝鮮婦人の姿（とくに、頭の上にものを載せて運ぶ）が朝鮮独特の姿であると捉えただろう。そのことを考慮すると、断言するのは難しいが、『白磁絵付皿「新羅朴順作」銘】【図4】の絵付は、湖南が朝鮮婦人と子供の姿を記録した。朴順という人に頼んでお土産として完成品の白磁にその風景を入れたものという可能性が考えられる。ただ、「新羅」という銘は、絵付の画題銘であるか、その風景を見た場所が旧新羅の地域であって書き入れたか今のところ不明である。

おわりに

朝鮮に関する湖南コレクションは、前述した『支那絵画史』のように、湖南の中国史文献とコレクションの流れの中で片隅に位置しているのが現状である。とりわけ、関西大学所蔵の朝鮮美術品に関しても同様であり、陶徳民氏の編集による『関西大学東西学術研究所資料集刊二十六内藤湖南と清人書画——関西大学図書館内藤文所蔵品集——』の中でも、「附載」に湖南の朝鮮コレクションが二つ載せられているだけである。それは、湖南が中国愛好者であったため、当然でもある。ただし、本稿で指摘したように、湖南は京都帝国大学の教師時代から朝鮮史にも興味があり、朝鮮史を教えながらも現地調査も行っていた。

そこで、関西大学博物館所蔵の湖南コレクションの中で、朝鮮美術品を調査する一貫として、本稿で朝鮮陶磁四点を取り上げて紹介してみた。朝鮮のやきものは、高麗時代の青磁と朝鮮時代の白磁、また朝鮮初期の紛青磁というやきものがよく知られているが、本稿で紹介した湖南の朝鮮陶磁コレクションは、名品とは言い難いが、時期別の特徴が知られる価値を有しており、時代的変遷の一端を研究するための収集品ではないかと考えられる。今後も調査を行い、湖南の朝鮮美術品コレクションの全容を明らかにしたい。

注

① 葭森健介「内藤湖南の芸術観の形成について」『書論』第四一号 特集内藤

- 湖南の詩稿 新出の巖谷一六日記、書論研究会、二〇一五年八月、三三三頁。
- ②「朝鮮安堅の夢遊桃源図」は、『東洋美術』（第三号、一九二九年九月）に掲載された論文であり、「高句麗古墳の壁画に就いて」は、一九一九年四月五日に大阪朝日新聞社主催の雑誌『國華』を刊行している國華社において講演した内容である。
- ③多野嶋剛「内藤湖南をめぐる中国美術品流入のネットワーク」『東京人』、都市出版株式会社、二〇一一年、七五頁。
- ④同書、七一頁。
- ⑤このことに関しては、大里武八郎手記・内藤戊申編「内藤湖南・北韓吉林旅行日記」『朝鮮学報』（第二十一輯、天理大学出版部、一九六一年）、内藤湖南手記・内藤戊申編「游清第四記——京城奉天調査旅行——」『朝鮮学報』（第二十三輯、天理大学出版部、一九六四年）や、名和悦子「内藤湖南の国境領土論再考——二〇世紀初頭の清韓国境問題——「間島問題」を通じて」（汲古書院、二〇一二年）をご参照願いたい。
- ⑥内藤湖南述・内藤戊申編「日韓の開闢説」『朝鮮学報』第三七号・三八輯、天理大学出版部、三二八〜九頁。
- ⑦同書、三二八頁。
- ⑧市川訓敏「発刊に寄せて」陶徳民編『関西大学東西学術研究所資料集刊二 十六内藤湖南と清人書画——関西大学図書館内藤文所蔵品集——』、関西大学出版部、二〇〇九年、iv頁。
- ⑨陶徳民氏によると、約二百点が納められている。同書、陶徳民「編著者序」、v頁。
- ⑩高島義郎「序」関西大学内藤湖南調査特別委員会編『関西大学所蔵 内藤文庫リスト No.1』、関西大学図書館、一九八九年。
- ⑪前掲書、市川訓敏「発刊に寄せて」、陶徳民編『関西大学東西学術研究所資料集刊二十六 内藤湖南と清人書画——関西大学図書館内藤文所蔵品集——』、iv頁。
- ⑫藤田高夫氏によると、二〇〇八年秋に関西大学図書館が公用旅券を購入したと指摘している。藤田高夫「関西大学図書館所蔵『内藤湖南旅券』——湖南の欧州旅行——」『関西大学図書館フォーラム』第一四卷、二〇〇九年、五五頁。
- ⑬二〇一七年一月三〇日に関西大学博物館の学芸員である山口卓也氏の許可を得て、湖南コレクションリストを閲覧した。
- ⑭最も古い文献である中国宋時代の徐兢（一〇九一〜一一五三）の『宣和奉使高麗圖經』で、徐兢は高麗青磁を絶賛している。また「陶器色之青者麗人謂之翡色」という文章から、高麗人は「翡色」を使っていたと思われる、現代韓国でもその言葉を使うが、中国では「秘色」という言葉を使い、ただに国ごとに統一されていない。
- ⑮『日暈文』を、日本では〈蛇の目高台〉と、中国では〈玉壁底碗〉と呼んでいる。…尹龍二「我らの古陶磁の美しさ」、ドルベゲ、二〇一一年、一九八頁。
- ⑯同書、二三〇頁。尹龍二氏は、李奎報の『東國李相國集』、崔滋の『補閑集』などに高麗人の心の世界がよく表われていると指摘している。
- ⑰姜敬淑「韓国陶磁史」一志社、一九八九年、一九五頁。
- ⑱同書、二七八頁。そして、尹龍二氏によると、『太宗実録』の記録に盗難防止のため、「官司銘」を入れるように命令したことが書かれていると指摘している。…前掲書、尹龍二「我らの古陶磁の美しさ」、二五三頁。
- ⑲前掲書、姜敬淑「韓国陶磁史」、二五三頁。
- ⑳前掲書、大里武八郎手記・内藤戊申編「内藤湖南・北韓吉林旅行日記」『朝鮮学報』第二十一輯、四〇六頁。

図版



【図1】《青磁日暈文茶碗》



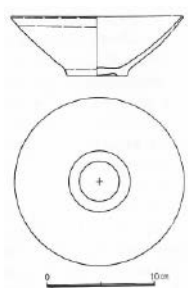
【図1-1】《青磁日暈文茶碗》



【図1-2】《青磁日暈文茶碗》



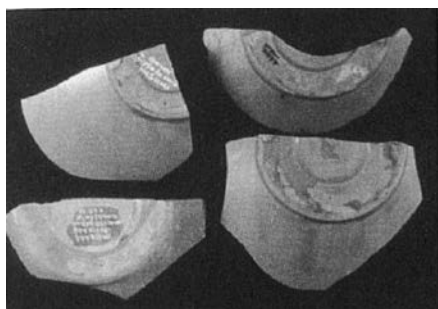
【図1-3】《青磁日暈文茶碗》



【図1-4】全羅南道康津郡大口面龍雲里の〈日暈文〉



【図1-5】京畿道龍仁二東面西里の編年資料



【図1-6】中国の〈日暈文〉



【图2】《青磁象嵌菊文皿》



【图2】《青磁象嵌菊文皿》



【图2-1】《青磁象嵌菊文皿》
器面外侧部分



【图2-2】《青磁象嵌菊文皿》部分
黑白象嵌の菊文



【图2-3】《青磁象嵌菊文皿》
器面内侧部分



【图2-4】《青磁象嵌菊文皿》



【图 2-5】《青磁象嵌荔枝菊花文大鉢》



【图 2-5】《青磁象嵌荔枝菊花文大鉢》



【图 2-6】《青磁象嵌菊花文八角皿》



【图 3】《紛青印花兩点文皿》



【图 3-2】《紛青印花兩点文皿》



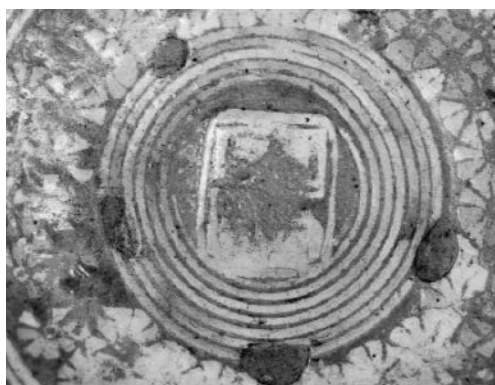
【图3】《紛青印花雨点文皿》



【图3】《紛青印花雨点文皿》器面外測



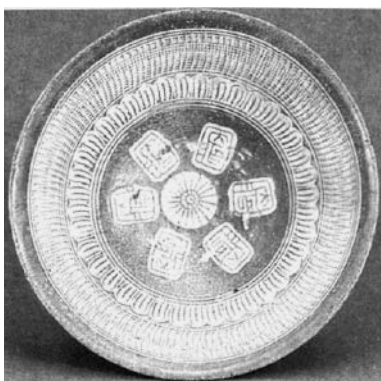
【图3-1】《紛青印花雨点文皿》部分



【图3-3】《紛青印花雨点文皿》部分



【图3-4】《紛青印花德寧部銘集團連圈文》



【图3-5】《紛青印花内瞻銘大鉢》



【图3-6】《紛青沙器印花文「内瞻」銘鉢》と「内瞻」印



【图 4】《白磁絵付皿「新羅朴順作」銘》



【图 4-5】《白磁絵付皿「新羅朴順作」銘》



【图 4-5】《白磁絵付皿「新羅朴順作」銘》



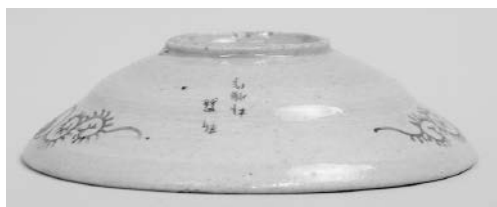
【图 4-5】《白磁絵付皿「新羅朴順作」銘》



【图 4-5】《白磁絵付皿「新羅朴順作」銘》



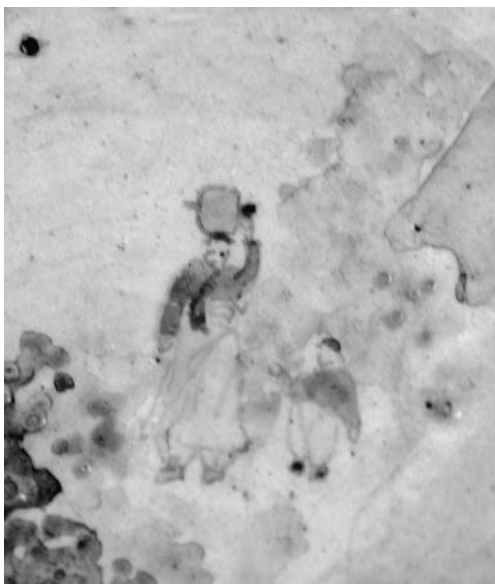
【图 4-5】《白磁絵付皿「新羅朴順作」銘》



【图 4-5】《白磁絵付皿「新羅朴順作」銘》



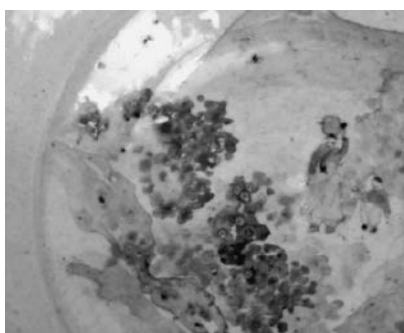
【图 4-5】《白磁絵付皿「新羅朴順作」銘》



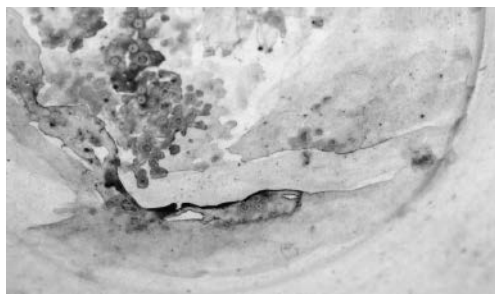
【图 4-1】《白磁絵付皿「新羅朴順作」銘》部分



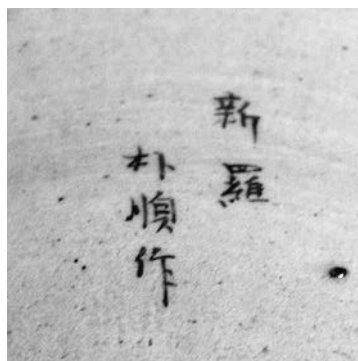
【图 4-3】《白磁絵付皿「新羅朴順作」銘》部分



【图 4-2】《白磁絵付皿「新羅朴順作」銘》部分



【图 4-4】《白磁絵付皿「新羅朴順作」銘》部分



【图 4-6】《白磁絵付皿「新羅朴順作」銘》部分



【图 4-5】《白磁絵付皿「新羅朴順作」銘》部分



【図4-7】 絵ハガキ 内藤乾吉宛（左：裏、右：表） 一九〇八年八月一八日

【図版出典】

- 図1、1-1-1-3、2、2-1-1-4、3、3-1-1-3、4、4-1-1-6
者撮影
- 図1-4、3-4-5 姜敬淑『韓国陶磁史』一志社、一九八九年
図1-5-6 尹龍二『我らの古陶磁の美しさ』ドルベゲ、二〇一一年
図2-5 香本不苦治『朝鮮の陶磁と古窯址』雄山閣、一九七六年
図2-6 若林美智子『高麗・李朝Ⅱやきものの物語』雄山閣、一九九〇年
図3-6 韓国国立中央博物館ホームページ <https://www.museum.go.kr/>
図4-7 名和悦子『内藤湖南の国境領土論再考』汲古書院、二〇一二年

